

長篠の合戦模様

織田信長・徳川家康の連合軍と武田勝頼の武田軍との戦いです。

この戦いは戦国時代の数多い合戦の中でも大合戦となり勝敗がきっちりついた戦いの一つとして有名です。

この戦いが注目されるのは一つは織田・徳川軍の鉄砲重視の戦い方による完勝と、もう一つは勝頼がこの敗戦で武田軍団の中で求心力を失い、武田家の崩壊が始まったことです。

戦いで鉄砲の威力の評価は徐々に高まりつつあった時ですが、未だ欠点もあり、一部の足軽が携帯する程度でした。弓矢に比べて玉の装填に時間がかかる、射程距離が短い（30～50メートル以内）、火縄銃ですので雨の日は使いにくいなどです。

しかし信長は鉄砲により武田の騎馬軍団を徹底的に粉砕しました。

以後戦国の合戦は足軽による鉄砲が主力武器になります。

合戦武器の画期と言えるでしょう。

敗戦の7年後に勝頼は味方の重臣たちの裏切り（信長に味方）により、父信玄が広げた信濃、駿河等の領域のみならず、先祖代々よりの甲斐をも一挙に失い、滅亡してしまいます。

2年前の信玄存命中は天下を取るのには信長か信玄かと言われていました。

そう意味でこの合戦は当時の天下分け目の戦いになりました。

信玄が没して息子の勝頼が武田家の当主になりました。（天正元年 1573年）

翌年、勝頼は信玄の路線を踏襲して徳川方の遠江の高天神城を落とします。大成功です。徳川と武田が競合する遠江にくさびを打ち込みます。

続いてその翌年の天正3年（1575）5月上旬に同じく徳川と武田が競合する三河の地での橋頭保になる長篠城を攻撃します。

これが織田・徳川連合軍との大合戦になる長篠の合戦とつながって行くのです。

一般には長篠の合戦（戦い）と言っていますが、合戦の地は長篠城の前方の

しだらがはら
設楽原で行われたので、設楽原の合戦とか、長篠・設楽原合戦と言う歴史

家も多いのですが、ここでは馴染みやすい長篠の合戦と呼ぶことにします。

勝頼は1, 3万の兵で徳川方の長篠城（城主 奥平貞昌）を囲みます。城兵は500人位で、勝頼は力攻めで簡単に落とせると思ったのですが、想像以上に抵抗が激しく落ちません。

徳川家康にとっても長篠城は重要拠点で去年は高天神城を落とされており、ここは援軍を送ってどうしても守らねばなりません。信長に援軍を要請します。もちろん天下を目指す信長にとって東海の家康領地の確保、拡大は重要です。

勝頼は信長が援軍を送ってくるか懐疑的でした。

しかし家康の強力な要請で自らが5月18日に兵3万をひきいて駆けつけて来ました。

軍勢については^{注1}甲陽軍鑑や^{注2}三河物語では織田・徳川連合軍10万余、武田軍

1, 5万とか2万余と言っていますが、^{注3}信長公記の記述の織田・徳川連合軍3, 8万と武田軍1, 3万説を取ります。これが通説でしょう。

注1 甲陽軍鑑；江戸時代の初期に軍学者高坂昌信によって編集された武田家の歴史物語

注2 三河物語：江戸時代の初期に徳川家康の三河以来の譜代旗本大久保彦左衛門の手記

注3 信長公記：織田信長の家臣太田牛一が書き表わした信長の一代記

勝頼が長篠城を攻めあぐんでいる間に家康からの援軍要請に答えて信長は5月13日に岐阜を出発し18日には設楽原の西側の極楽寺に本陣をしきます。

ここで長篠城とその前方の設楽原の決戦地の戦場の概括地勢を見てみます（別紙「設楽原対陣図」を参照してください）。

東の山側に長篠城です。徳川方の奥平定昌が守っています。その北方が信濃の甲斐と続きます。勝頼軍が遠征してきた方向です。

長篠城の西前方に1キロメートル幅の盆地があつてその先に丘があてその先が設楽原です。

18日には信長は設楽原の西側の山側裾に東側に向かって陣地を作ります。長さ2キロメートルに渡って馬防柵を築きます。

柵の前は浅い、小さな川が流れています（連子川）

この柵の後ろに兵を横に布陣させます。

信長は布陣の中央の後ろに本陣（極楽寺から移動）をその右わき（南）に家康が本陣を構え、北側布陣軍は信長軍、南側布陣軍は徳川軍となります。

さて勝頼の武田軍です。

5月初旬に長篠城を包囲してたびたび攻撃しても城は落ちません。

そうこうする内に信長。徳川連合軍が設楽原に陣を構えました。相手は3万8千では味方は1万5千です。

甲陽軍鑑によると軍勢の差が大きいことからここは甲斐に引き上げようと提言する謙信以来の重臣（馬場美濃、内藤修理、山県三郎兵衛、小山田兵衛尉等）と決戦を主張する勝頼の側近長坂長閑、跡部大炊助がおり、勝頼は決戦を選んだとしています。

長篠城の北側の医王寺に本陣を構えていた勝頼は西に向かって移動し、織田・徳川連合軍が築いた馬防柵と連子川の対面に横列に陣取ります。間の距離は50メートル位で、幅は2キロメートル位でしょう。

決戦は21日ですが、前日の20日夜中に織田・徳川両軍の選抜隊2千が長篠城の南側にある武田方が駐屯していた鳶の巣砦を急襲し、撃破し、長篠城の救出に成功しました。

両軍の決戦は21日の日の出より午後2時頃（未刻）までの戦闘でした。

信長公記によると武田軍は五番手（隊）に分けて織田・徳川連合軍に襲い掛かってきたが、連合軍は柵の内より鉄砲射撃で打倒した。武田軍は次第に無人となり、勝頼は旗本と共に北方の鳳来寺に向け敗走した。

鉄砲による一方的な完勝としています。信長公記は信長の家来が書いたものですのでいくらか織田信長びいきとなるでしょうが、まあ完勝でしょう。

武田びいきになる甲陽軍鑑では、最初は馬場信春隊や内藤修理隊は右翼（連合軍では左翼）攻撃で勝ったが、その後左翼や中央で負けたとしています。

大久保彦左衛門作の三河物語は徳川と自家引きですので、連合軍の完勝と大久保兄弟（彦左衛門の兄たち）の活躍を記しています。

大将クラスの戦死者はすべて武田軍で馬場信春、真田信綱、昌輝兄弟、土屋次、内藤昌豊、原隼人、安中昌繁、山県昌景、望月信雄となっています。

どうしてこんなに大きく勝敗が分かれたのでしょうか。

大体戦いは古今東西、大が寡を制します。二倍以上の大軍に向かうことは避けず。

ただ奇襲攻撃によって寡が大に勝つことがまれにあります。桶狭間の戦いの

今川義元に対する織田信長の例が有名です。

長篠の合戦は奇襲戦ではなく正面から戦う野戦です。

信長は桶狭間の戦い以降の戦いはすべて相手より大軍で攻めています。

長篠・設楽原の戦いでは勝頼軍1万5千に対し、織田・徳川連合軍は3万8千です。勝頼はよほど武田の騎馬軍団を過信したのでしょう。

しかし城を落とすには攻めては城兵の二倍以上の兵力が必要と言われていません。

しかし勝頼は500人が立て籠もる長篠城を1万5千人兵力で20日ほどかかっても落とせませんでした。

これは攻め手が下手と言わざるを得ません。武田軍は騎馬による野戦は上手くても攻城戦が今一つなのでしょう。

勝頼は難攻不落と言われていた遠江の高天神城を落としましたが、これは戦う前に城主が降参開城したからで、攻城戦はやっておりません。

合戦の勝敗は兵員の数、地勢（山、川）の優劣、防備（柵、城壁、堀）の施しが重要ですが、更に有力な武器の整備です。

古代から中世は騎馬での弓合戦が主流でした。それが徒士（足軽）による歩兵戦となり、戦国時代後期は鉄砲の出現で足軽による鉄砲戦が主流になります。騎馬での戦いは騎乗者が的になりやすい鉄砲に弱いのです。

騎馬は戦場ではほとんど使わなくなります。戦場までの徒士（足軽）の指揮用や伝令用には使われます。

鉄砲の数が勝敗を大きく作用します。

騎馬隊の活動は有効でなくなりなります。

長篠の合戦では兵員数は織田・徳川連合軍が3万8千、武田軍の1万5千、鉄砲の数は圧倒的に織田軍が多く、地形は織田・徳川軍の前は浅い川でその前に柵の拵えです。武田軍は鉄砲に弱い騎馬侍が先頭での攻撃。柵の内から大将、部将の騎馬侍をねらい打ちです。これで負けました。

これまで武田軍は騎馬軍団を先頭に徒士集団を従えての猛烈な勢いで敵集団の前面攻撃です。この勢いに敵集団は崩され敗退していきました。

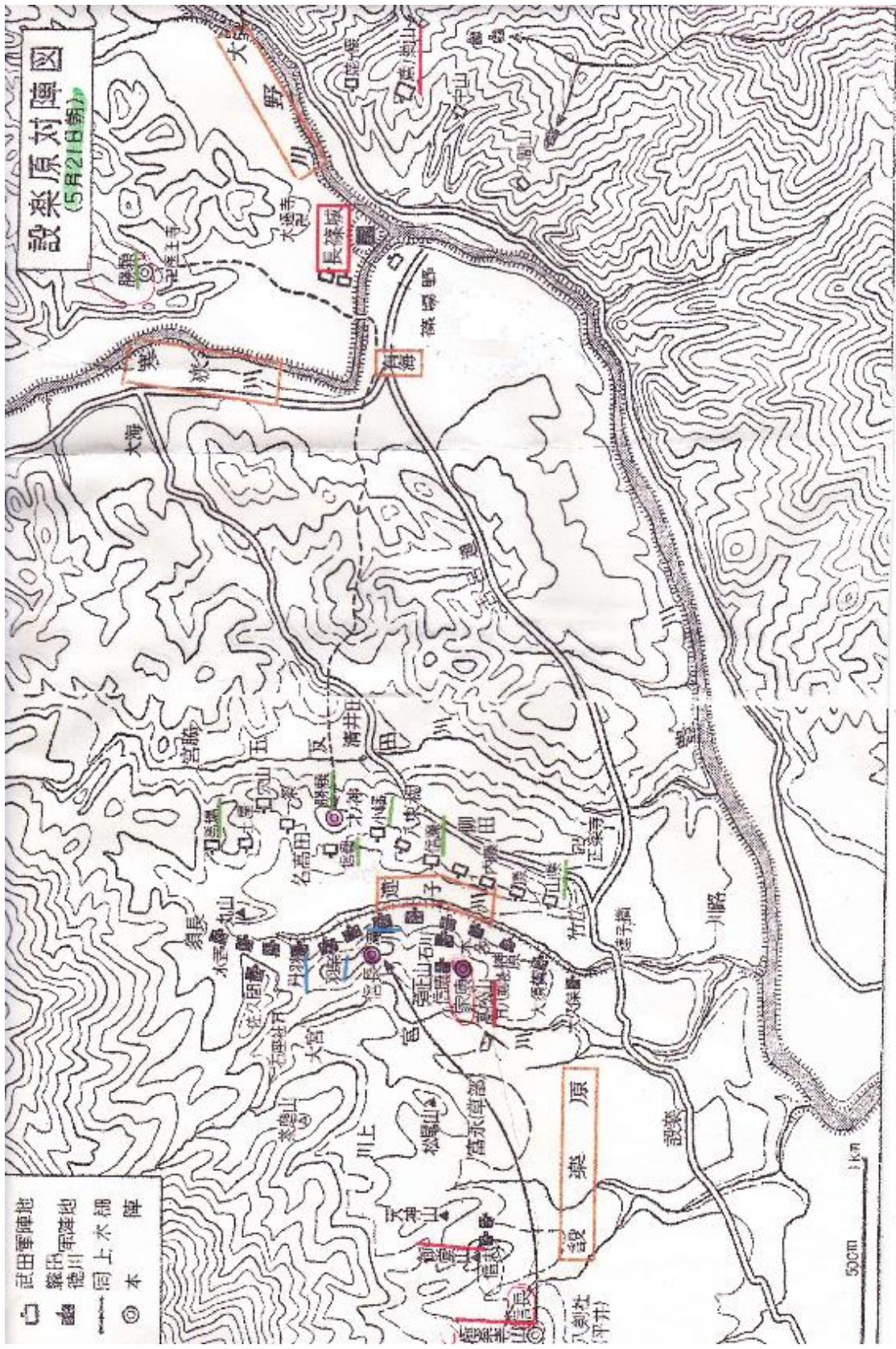
この戦法はもう織田信長には通用しなかったのです。

長篠の合戦の顛末です。

以上

2020年7月13日

梅 一声



設楽原対陣図
(5月21日朝)

- ☐ 武田軍陣地
- ☐ 徳川軍陣地
- ☐ 同上
- ◎ 木

500m 1km